

女性・異文化

ーフィンランドにおけるゲイシャのイメージー

植村 友香子

要 旨

西洋においてゲイシャは日本女性の象徴として、ステレオタイプ化されている。16世紀以降形成された、従順で性的に自由な美しい東洋の女性＝ゲイシャのイメージは、西洋の異文化認識の一つの産物であって、そこには西洋の世界観、女性観が反映されている。フィンランドにおいてゲイシャは現在でも日本女性の象徴の意味をもつとともに、日本女性という枠を離れ、ある種の女性の典型として存在している。

【キーワード】ゲイシャ、女性、イメージ、異文化、アイデンティティ

1. はじめに

ヘルシンキで発行されている「HELSINGIN SANOMAT」はフィンランド最大の日刊紙である。2001年3月10日の同紙に平均寿命の延びについての記事が載った。言うまでもなく日本は世界に誇る長寿国で、特に女性の平均寿命は世界最長である。その記事には、着物を着た老女の写真がかなり大きなサイズで添えられ、「日本人の女性は世界で最も長生きする。写真は百歳の芸者あさじ姐さん。」と説明がつけられている。（資料1）

記事の内容は、アメリカとフランスの科学者の研究を引いて、長寿の生物学的な限界について考えるもので、日本人については長寿の代表例として軽く触れられているにすぎない。日本で同様の記事が書かれる場合、果たして芸者の写真が添えられるだろうか。フィンランドでは、日本人の女性といえばまず思い浮かぶのが芸者だということを表した例だといえよう。

フィンランドで日本人女性について言及される場合、芸者が取り上げられることが少なくないような気がする。例えばその前年、2000年の春にはヘルシンキで「芸者とキャリアウーマンー日本女性の役割変化」と題するセミナーが開かれた。同じ頃テレビでは、外国放送局の制作した芸者についてのドキュメンタリーが放送された。

私の知り合いのフィンランド人たちは日本について特に詳しく知っているわけではないが、日本人の生活については、ある一定の共通したイメージを持っている。それは、“日本は男性優位のヒエラルキーの強い社会で、男性が死ぬほど働くのに対し、結婚し出産した女性はキャリアを捨てて、主婦となる。但し家庭の中では逆に女性の力が強い”というものである。こうした男性を支える日本女性のイメージは、どこかでゲイシャを思い出させるものがあるのだろうか。

実はゲイシャはフィンランド人にはとてもなじみのある単語なのである。というのは、ゲイシャはフィンランドで最もよく食べられるチョコレートの商品名になっているからだ。それが日本語であると知らなくても、ゲイシャといえばたいのフィンランド人が、そのチョコレートとピンク色の包装紙に描かれた芸者の絵を思い浮かべるにちがいない。

国際交流基金派遣の日本語教育専門家として、ヘルシンキ大学で日本語を教えるために日本を発ったのは 1993 年だった。2 年の滞フィン予定が例外的に 4 年に延び、その後 1 年半のアメリカ暮らしを経て、ヘルシンキ大学の専任講師として再びフィンランドに舞い戻って 2 年半。日本を生活の拠点としなくなってまもなく 8 年になる。その間に折りに触れ、「ゲイシャ」が私の視界に入ってくることがあった。

欧米で言うゲイシャと日本の芸者は、それぞれの文化的文脈において存在する、似て非なるものである。欧米ではゲイシャが、実体のない日本を分かりやすく体現化したものとして存在としている、ということがあるだろう。しかし、ゲイシャの文化的な意味はそれに限られるものではない。なぜ西洋でゲイシャのイメージが必要とされたのか。どのようにゲイシャ像は形成され、現在それはどのような意味を持って用いられているのだろうか。

本稿では私個人がフィンランドで目にしたゲイシャのイメージをもとに、ゲイシャを通して見えてくる、異文化および女性について考えてみたい。

2. ゲイシャチョコレート

フィンランドに着いたのは 1993 年 7 月だった。フィンランドを訪れたことはなく、緊張しきったまま、出迎えの車に揺られて市の中心にある大学の宿泊所に到着。とりあえず荷物を下ろした私に、前任者の方が「ようこそフィンランドへ」として取り出したのが「ゲイシャ」なる名前のチョコレートだった。

日本を発つ前、散々言われたのが、「フィンランドには『東郷』というビールがある。日露戦争で勝利を導いた東郷將軍を記念したもので、日露戦争でロシアが敗北したのがフィンランド独立のきっかけになったので、それを記念してその名がつけられたのだ」という話だった。（実は私は一度もそういうビールを見たことがないが、実際に東郷將軍の似顔絵をラベルにした amiraali というビールがあるらしい。）しかし芸者という名のチョコがあるという話は聞いたことがなく、ピンク色の包装紙と、そこに描かれた着物姿で扇を持つ芸者の絵を見ながら、“異国”を実感したような気分になった。（資料2）

薄いピンクを背景に、包装紙の中心には茶色に金の縁取りで、「GEISHA」と書かれている。その上部、ちょうどIとSの字の真上に、黒髪を結び上げかんざしを挿し、白地に赤い花模様の振袖を着た女性が、左向きに正座して座り、小首を傾げて正面を見ている。女性は左手に日の丸のついた大きな扇子を広げてもち、女性の背景には金色で扇の形が浮かび上がっている。他には、会社名（Fazer）と4カ国語で「ヘーゼルナッツフィリングいりミルクチョコレート」と印刷された、きわめてシンプルなパッケージである。

GEISHAが日本の芸者をさしていることは、この女性の身なりから一目瞭然といってよいだろう。

ゲイシャチョコレートはフィンランドの菓子メーカー、Fazerの製品で、フィンランドで最も人気があるチョコレートの一つである。なぜゲイシャを商品名にしたのかについては、この製菓会社のホームページに次のような記事がある。（原文はフィンランド語）

ゲイシャは1910年に初めキャラメルの名として用いられた。ゲイシャチョコレートが市場に登場したのは1964年である。ゲイシャの名の由来は知られていないが、そのフィリングがjaponaistayte（ジャパニーズ・フィリング）と呼ばれることに関係があるらしい。

ここから明らかなのは、チョコレートのフィリングの名に「日本」がつくことから、日本＝ゲイシャという連想で、ゲイシャの名がつけられた。つまり、日本のイメージがゲイシャで代表されているということであろう。最初に商品名として登場したのは

1910年というから、この頃には既に「日本＝ゲイシャ」の図式がフィンランドにおいてある程度成立していたものと思われる。1964年から現行のチョコレートの名前となったとあるが、1964年といえば東京オリンピックが開催された年で、ヨーロッパにおいては日本の宣伝にゲイシャが用いられることが多かったのかもしれない。

この製菓会社はゲイシャチョコレートを「味わい深く、繊細、ロマンチックで永遠」という言葉で定義する。商品の名に用いるからには、いいイメージが含まれるのは当然だろうが、果たしてそのイメージはどの程度一般的なもののなのだろうか。

そもそも芸者が何者であるのかということについて、一般のフィンランド人の知識は深くない。「着物を着た日本人の女で、売春婦のようなものらしいが、よくは知らない」というのが最も一般的なものではないだろうか。芸者と聞けばまずこのチョコレートを思い出し、パッケージのピンクという色調、黒髪・着物・扇という小道具から、ロマンチックでエキゾチックな異国の女をイメージするが、その実態は何も知らないというのが本当のところだろう。

異文化をいかに視覚化して伝えるかは非常に興味深い問題である。2000年の春、ヘルシンキの街中にこのチョコレートの広告ポスターが現れた。（資料3）

パッケージに描かれた女性を実際のモデルを使って肉体化したものと思われるこのポスターでも、ピンクが全体の主たる色調となっているが、絵では現れていない「誤り」がいくつか見られる。その最も顕著なものは、芸者と思われる着物姿の女性が男物の下駄を履いていることだろう。その他にも身ごろの打ち合わせがゆるすぎる、とか、帯の位置が下すぎる、おはしよりが出ていない、など着付け上の不自然な点がいくつか指摘できる。髪の毛の結い方も日本髪らしく見せてはいるが、不自然に大きいように思われる。

何はともあれ、着物を着、大きな扇をもった女性が、画面の中心にまっすぐ立っている。小首を傾げ、正面を見つめ、わずかに口元を持ち上げ、微笑みを浮かべている。

広告には「毎日、夢の小さな一切れを」（Jokaisessa päivässä on pieni pala unelmaa.）というコピーがつけられており、このゲイシャおよびチョコレートが「unelma」つまり「（実現させたい）夢」と結び付けられている。（このポスターはその後少し修正され、下駄が草履に替えられて現在でも用いられている。）

実は「ゲイシャーエキゾチックな東洋の女性一夢」という連想は、製菓会社の考え出したイメージではなく、16世紀から19世紀にかけてヨーロッパで叙々に形成されたイメージなのである。そしてこのイメージは、日本女性という枠を越えて、女性の一つの原型を形作り現在でも用いられている。

3. 西洋社会における日本女性のイメージ：ゲイシャイメージの形成

19世紀の後半までに日本を訪れたヨーロッパ人によって形成された日本女性像は今日にも依然として強い影響を与えている。そのイメージを一言で代表する存在がゲイシャである。

Jalagin (1998)は、16世紀から1870年代の間に書かれた、ヨーロッパ人による日本見聞録を分析して、ゲイシャとして描かれたステレオタイプの日本女性像には、ヨーロッパ人が求める女性像や世界像が反映されていることを指摘している。以下、Jalagin(1998)によって、ヨーロッパにおけるゲイシャ像の形成についてみておきたい。

16世紀に主として、スペイン、ポルトガル、イギリス、オランダ人たちによって描かれた日本女性は、総じて容姿においても振る舞いにおいても望ましいものであった。眉を抜き、歯を黒く染める化粧法も驚きの対象ではあっても、後の19世紀後半のヨーロッパ人が示したような嫌悪感は表されていない。娘を売春婦として売る、下層階級の習慣については批判しているが、責められるべきは「異教の社会習慣」であって、娘たち自身はその犠牲者とされた。

鎖国時代に書かれた記録では、日本女性の社会的な地位について注目した記述が多い。例えば、日本では夫が何人もの妾を持つことが許されており、夫婦間の性的自由と忍耐の反映と解釈されている。また、日本女性を他のアジアの女性と比較し、日本女性を優位に位置付けるといった記述が見られるようになった。

1850年代以降に書かれた日本についての本には、新しい目的があった。それは遠い日常の異国の話を読むことで、日常を忘れたたいという読者の期待に応える話題を提供するということである。ヨーロッパにはアラブの女性を主とした、従順で屈託がなく、性的に自由で情熱的な「東洋女性」oriental womanのイメージができていた。

19世紀の旅行記や小説に描かれた東洋は、男性上位の社会で、女性は男性の性的な目的物として存在する。そこにあって女性は、官能的で多少愚かであるが、何よりも性的快楽を望んでいると考えられた。

18世紀の後半に日本を「再発見」したヨーロッパ人達は、その東洋女性の延長に、日本の女性を位置付けた。しかも日本女性は、純真無垢なイメージを損ねることがなかった。なぜそれが可能であったのか。

19世紀のヨーロッパ人にとって、世界は「主体」としての西洋文明世界と、支配される「対象」としてのその他の世界とに分かれていた。女性を対象物として捉えることも、このような世界観の反映である。日本の女性は保護され自ら判断し行動する主体としてではなく、夫のために存在するか、ヨーロッパ文明によって過酷な現実の生活から解放されることを待つだけの、対象として捉えられたのである。

日本女性のイメージは、ごくわずかのヨーロッパ人による記述に基づいて形成されたものであるにもかかわらず、その一面的なイメージが西洋の芸術やマスメディアにおいて繰り返し用いられてきた。1860年以降、貧しい日本の現実が日本を訪れたヨーロッパ人によって記述されるようになって、それは一般の読者に広まることがなかった。西洋における日本女性のイメージは、魅力的なかわいい「娘」でありつづけたのである。

主体としてではなく、支配され所有される対象としての日本女性のイメージは、絵画の分野においても存在した。Kortelainen (1998) は19世紀後半の初期ジャポニズムにおいて、画家がいかに日本の事物を人物画の中に取り入れているかを分析して、ジャポニズムの女性性を指摘している。

パリジェンヌに着物を着せ扇を持たせ、その周囲に日本の事物を配するなどの構図をとった人物画は、男性の画家によって男性の観客を想定して制作されている。ここでは、女性が珍しい日本の事物と同様、男性によって所有される対象であることが暗示される。ジャポニズムに先立ってはオリエンタリズムが存在した。オリエンタリズムはハーレムやオダリスクに代表される想像上の産物だが、このオリエンタリズムを通して日本というテーマ、つまり芸者のイメージや日本の品物を手にしたパリの女性が描かれた。そこでは女性を所有することと芸術を購入することがつながっている。

Kortelainen は、ジャポニズムを通して画家が自らのアイデンティティを定める過程を明らかにできるとしている。例えばフィンランド人画家で最初に日本の事物を絵に取り入れたのは Albert Edelfelt だが、彼のジャポニズム受容は前述の文脈に拠っている。それは、フィンランドがロシアに結び付けられることの多かった当時のヨーロッパにあって、ヨーロッパ人としてのアイデンティティを確立するために必須のことで

あった。これに対し、Helene Schjerfbeck の自画像では、白い着物を着、白く顔を塗った女性つまり Schjerfbeck 自身の自立した女性画家としてのアイデンティティが、芸者のイメージを活用しつつも、前述の文脈に拠ることなく表現されている。

4. フィンランドにおける日本女性のイメージ：詩の中の Geisha

ゲイシャイメージの受容という観点からみれば、フィンランドはヨーロッパの一員といえる。フィンランド人画家たちの作品に、パリにおけるジャポニズムによるゲイシャのイメージが反映しているように、文学の分野においてもその影響が見られる。

フィンランドを代表する詩人の一人 Larin-Kyösti は、1903 年に発表した詩集「Kellastuneita lehtia」に、「Geisha」と題する詩を収めている。この詩を私なりに訳して以下に紹介したい。

Esirippu nousta alkaa,
virtaa hienot univiinit
Geisha nostaa pientä jalkaa ;
vinosilmä mandariinit
lohikäärmekuva-matoillaan
heiluttavat palmikkojaan.

幕が上り
まろやかな媚薬の酒が流れると
芸者は小さな足を上げる。
上がり目の中国人たちが
龍の模様の絨毯の上で
辮髪を振る。

Hän hiipii, hyppii kuin Kiusiun kauris,
kuin viiniköynnös hän kiemuroi,
kun punapaperi-lyhdyt heiluu
ja bambupillit ne nurkass' soi.
Kay povi laineissa, helskyy vyö,
on halla silmät kuin mustin yö,
ne palaa, maahan ne miehen lyö;
mut Geisha, Geisha ei saa koskaan rauhaa.

彼女は九州の山鹿のように、忍び歩き飛び跳ねる、
葡萄のつるのように身をくねらせる、
赤い提灯がゆれ
竹笛が舞台の隅で鳴ると。
胸を高鳴らせ、帯を煌かせて、
彼女の目は漆黒の夜のよう
その目が燃え、男を地に跪かせる。
けれども芸者がやすらぎを得ることはない。

Hondosaaren tytär sorjin
liitaa lailla iltaperhon,
kuningatar sadoin orjin

ホンドの島の華奢な娘が
夜の蝶のように風に身を浮かべる、
百人のしもべを従えた女帝は

on hän alla silkkiverhon,
kuningatar kiivaan karkelon
vallalla nuoren vartalon.

絹の帳の中に、
女帝は激しく踊る
若い肉体の力で。

Hän lavall' liikkuu, hän hymyy, hurmaa
kuin yli ruusujen lentää vois,
Mikadon poika, niin huhu kertoo,
jo linnan tarjonnut halle ois.
Ei Geisha sydäntään antaa voi
vaikk' kiihkeen katseen hän moneen loi;
kuin keltalumme niin vienon, oi,
on Geisha, Geisha, ei saa koskaan rauhaa.

彼女は舞台で動き、微笑み、我を忘れる
まるで薔薇の上を飛ぶかのように
噂には帝の息子が
城をくださるとおっしゃった。
芸者の心はさしあげられない
たとえ熱いまなざしはあたえようとも。
黄色い睡蓮の花のように可憐な芸者、
芸者がやすらぎを得ることはない。

Lyhdyt sammuu, verho taipuu,
yö jo peittää huoneen himmen,
katsojatkun yön vaipuu,
prinssi noutaa ilo-immen,
Geisha hovivaunissa soiluun pois
kuin hän sadun prinsessa ois.

提灯の明かりが消え、帳が下りる、
夜が部屋を闇に包んでしまい、
観客も夜の中へと沈む
東宮は遊び娘を迎え
芸者は車で立ち去る
まるで物語の中の姫のように。

Hän prinssin polvilla kiehtoo, kuiskaa,
mut aatos saarella vaeltaa,
soi Hondon saarnit yön vihkivirtta,
sen linnut lemmeistä kuhajaa.
Ja köydenpunojan poika vaan,
— min rantaan jätti hän suremaan —
hän itkee, — prinssi on kiihkoissaan,
kun Geisha, Geisha ei saa koskaan rauhaa.

彼女は東宮の膝の上で歎び、ささやく
けれども思いは島を駆け巡っている。
ホンドの木々が夜の契りの曲を奏で
鳥の心は恋で千々に乱れる。
網編みの息子だけが
—娘に去られて浜辺で嘆く—
泣いている、—東宮は熱く燃えている、
芸者は安らぎを得ることがない。

まず指摘すべきは、詩全体の枠組みを設定すべき第一聯において、日本と中国の混同が見られるということである。Geisha nostaa pientä jalkaa の「小さい足」というのは、中国の纏足の習慣をふまえてのことではないかと思われる。さらに

vinosilma mandariinit/ lohikaarmekuva-matoillaan/ heiluttavat palmikkojaan

上がり目の中国人たちが 龍の模様の絨毯の上で 辮髪を振る。

と続いて、辮髪姿の中国人が現れている。

Kiusiun kauris の Kiusiu は九州のことであろうし、小さな島の名として用いられている Hondo は日本語の「本土」からきているのではないか。また、皇太子を表すのに Mikadon poika と「みかど」の語が使われているなど、日本語を知る者には自明のことだが、果たしてどの程度読者がそれを理解しただろうか。ゲイシャの国のイメージは、中国を主とする東洋のエキソチシズムにもとづいている。

この詩においては、ゲイシャが舞台の上で恋の芝居を演じている設定がなされている。そこでは、ゲイシャの対象化が舞台を見る観客の視線、およびこの詩を読む読者の視線という二重の視線によってなされることになる。そこにおいてゲイシャは見られ、定義される対象物であって、自ら他に働きかけ行動する主体ではありえない。

舞台の観客が見るゲイシャは、「山鹿のように歩き跳ね」「葡萄のつるのように身をくねらせる」。「夜の蝶のように」軽やかで、「男達を跪かせる漆黒の目」を持ち、その「若い肉体」は「激しく踊る」。「百人のしもべ」を従えた「女帝」にも喩えられているが、しかし皇太子の申し出にも心は許さない。「黄色い睡蓮の花のように可憐な」娘なのだ。

第五聯において、舞台の提灯が消え、「観客も夜に沈む」というのは、観客に見られる芝居が終わったということだろう。しかし、その後もゲイシャの話は続き、彼女には故郷の島に心を寄せる男がいることが語られる。つまり、詩の読者には、たとえば身は許しても心は愛する男のもとにある、純粋な娘の姿が示される。その結果、繰り返される「芸者は安らぎを得ることがない」の意味にも変化が生じる。第四聯までに暗示されるのは、身を売る官能的な女で、その忌まわしい生業のゆえに安らぎを得られないと解釈できるが、最終聯においては、心身を引き裂かれるゆえの苦しみが表されるといえる。

この詩においても、ヤラギンの指摘する、性的な「東洋女性」でありながら純粋さを失わない可憐なゲイシャのイメージが投影されていることが明白である。

5. 映像表現の中のゲイシャイメージ

1993年に初めてゲイシャチョコレートのコマーシャルを見たときは、ずいぶん驚いた。ゲイシャというからには日本女性のはずなのに、そのコマーシャルが表している雰囲気は、日本とは思えなかったからだ。実は広告主の意図するイメージは「東洋の神秘」であって、そこに日本女性像を見出そうとするのは的が外れていたのである。（このことは広告主の製菓会社に問い合わせたことである。）このチョコレートのコマーシャルはいくつも作られているが、私が見たものの中で一番古いものは、次のような構成になっていた。

小船に乗って西洋人の男が広い河のようなところを近づいてくる。男は船の先頭に立ち、前方を見つめている。そこに東洋の女性の顔がオーバーラップし、やがて彼女が川岸のような草地の中に正座している姿がうつる。船の男性の姿と、正座する女性の映像の間に旗を持って川岸に立つ男達（彼らは東洋人と思われる）の姿が映る。さらに男の顔がアップになり、古い地球儀がオーバーラップしてくる。最後はとろけるチョコレートが映ってこのコマーシャルは終わるのだが、登場人物が着物を着ているにもかかわらず、私には全体の印象が日本とは思えなかった。女性のはれぼったい目とそれを強調するかのような、ピンクのアイシャドウも、エキゾチックではあるが美しいとはいえない。ゆっくりと水面を滑っていく船の動きと音楽が合わさって、けだるい印象がする。

いわば「東と西の出会い」をテーマにしたともいえるこのコマーシャルは、夢の女性を求めて遙かなたの東をめざす西洋の男が描かれている。ここでも、意志を持って行動する主体としての西洋（男）と、発見されるのを待つ、対象としての東洋（女）という図式が繰り返されている。

現代は映像の時代ともいわれるが、フィンランドにおいて映像化されたゲイシャのイメージは上述の東洋女性の型を踏襲している。そしてこのイメージは映画の中にも見出すことができるのだ。

フィンランド映画についての知識を持ち合わせていない私には、フィンランド映画における、日本や日本人のイメージについて論じることは不可能なので、ここでは一つの例に言及するだけにとどめておく。

Veikko Aaltonen 監督の『Rakkaudella Maire』（愛をこめて、マイレより）は、裕福でありながら夫や息子との絆をもてず、孤独感から精神を病んでいくマイレという

女性の話である。夫は東京に駐在して働いており、めったに帰国しない。ある日帰国した夫とレストランで食事中、日本での駐在期間を延長したいという話を持ち出される。夫の顔を見ているうちに、マイルは幻想を見始める。着物ふうの衣装を着た東洋人の女性が現れ、人前かまわず夫に熱烈な接吻をするのだ。やがて夫と女は連れ立って立ち去り、画面がきりかわって同衾するふたりが映る。

ここに現れた女性はゲイシャチョコレート的女性と視覚的に共通点が多い。エキゾチックな容貌とほっそりとした肢体は肉感的、官能的という語の正反対の印象を与えるが、非常に性的な存在である。そしてマイルは、男性によって対象化された女性としてのゲイシャイメージを受け入れている。男性の視線を内在化しているのだ。

Aaltonen 監督は、この女性のイメージと日本女性の関係についての私の質問に次のように答えた。「あの女性は、マイルという病的な女性が見た幻想であって、特に日本女性というわけではない。あのイメージはマイルが日常、見聞きするものから形作られているわけで、その中には例えば、コマーシャルの影響もありえる。」

ここにはゲイシャイメージの受容の本質が端的に言い表されているように思える。ゲイシャは具体的な形をもって存在する。具体的というのはつまり、それが女性であり、特定の容貌（黒髪の東洋人）、服装（着物）、行動（男を待ち受け入れる）をすることが想定されているということだ。広告などの媒体を通じて、日常目にするそのイメージは人々の記憶に残り、時代を経て繰り返し用いられる。

6. おわりに

そもそも私がゲイシャに興味をもつようになったのは、日本人女性として、フィンランドの友人たちからゲイシャになぞられることがままあるためだった。たわいのない冗談とはいえ、西洋でゲイシャが日本人女性の象徴として使われるのは確かだ。私自身にとっては、芸者もゲイシャもいわば住む世界の違う人であるが、フィンランド人から見れば、ゲイシャは私のアイデンティティの一部になっているのかもしれない。

ゲイシャが西洋では日本人女性の象徴として使われると述べたが、実は日本人自身も外国に日本を紹介する時は、やたらと着物姿の芸者を広告に使う。その時、西洋のゲイシャのイメージがどの程度意識されているのだろうか。日本人が意図するメッセージと西洋で受け取られるメッセージとの間には根本的な違いがあるように思う。

異文化交流とは、いかに他者に自己を表現していくかということが、出発点になる。芸者を日本を紹介する手段として用いることは、他者によって作られたイメージによって自己を表現するという倒錯した関係に、無意識のうちに陥ることになってはいないだろうか。

それとも異文化交流とはそうした自己・他者の倒錯関係の中にのみ、存在するものなのだろうか。異なった文化圏の人々が直接交流する機会は増えたが、異文化理解がそれに比例するようには進んでいかないのは、そのためなのかもしれない。

折りしもアメリカ人作家による小説『Memoirs of a Geisha』がベストセラーになり、フィンランド語も含めて多くの言語に翻訳され読まれている。ハリウッドで映画化もされるという。21世紀のゲイシャはどのように映像化されるのだろうか。

参考文献

- (1) Jalagin, S. (1998). "The fidelity of the wife and the purity of the maiden" – The image of Japanese woman as an example of the origins of a stereotype. *Acta Universitatis Ouluensis B* 30, 85-101
- (2) Kortelainen, A. (1998). Looking at Japonism: images of identities. *Acta Universitatis Ouluensis B* 30, 51-57
- (3) Vesterinen, I. (1992). *Geishat ja muita etnologisia kirjoituksia*

(ヘルシンキ大学専任講師)

資料 1

Satavuotiaita on va

► Me kuolemme, vaikka lääketiede nujertaisi kaikki sairaudet

Arja Kivipelto
HELSINKIN SANOMAT

SAN FRANCISCO. Harva meistä sinnittelee satavuotiaaksi, eikä lapsitammekaan kovin moni ole hengissä niin vanhana. Elinajan odote yltää länsimaissa sataan vuoteen vasta kauan sen jälkeen kun kaikki nykyisin elävät ihmiset ovat kuolleet – jos silloinkaan.

Japanin ja Ranskan tilastoihin taseluku ui 2100-luvulla, Yhdysvaltojen 2500-luvulla.

Näin ennustavat Jay Ols-hansky Illinoisin yliopistosta, Bruce Carnet Chicagon yliopistosta ja Aline Desesquelles Kansallisesta väestömuut-
muskuksesta Pariisista hel-
mikuun Science-lehdessä.

Tutkijoiden arvion perustu-
vat Japanin, Ranskan ja Yhdys-
valtojen kirjaintuon kansa-
laistensa kuolleisuudesta ja
elinissä vuosina 1985–1995.

Ryhmä teki vastaavan tude-
muksen kymmenen vuote sit-
ten ja esitti, että vastasyntynei-
den odotetavissa olevan elin-
iän realistinen yläraja kieppuisi
85 vuoden denoilla eli 88:ssä
naissilla ja 82:ssä miehillä. Sil-
hen päätettiin Ranskassa vuon-
na 2033, Japanissa 2035 ja Yh-
dysvalloissa 2182.



Japanilaiset naiset ovat maailman pitkäikäisin ryhmä. Kuvassa geis-
ha Asaji Nehsan satavuotiaana.

lääke epäilevä yleistä: "Run-
sas sata vuotta sitten kukaan ei
lääketiede nujertaisi kaikki sat-
raudet. Biologia ei..."

Elinajan odote eriäissä

0 vuotta	
Japani	84,5
Islandi	84,0
Ruotsi	83,5
Sveitsi	83,0
Espanja	82,5
Kreikka	82,0
Norja	81,5
Ranska	81,0
Britannia	80,5
Saksa	80,0
Suomi	79,5
Yhdysvallat	79,0
Tanska	78,5
Lotvia	78,0
Sveitsi	77,5
Unkari	77,0
Kiina	76,5
Kolumbia	76,0
Latvia	75,5
Viro	75,0
Venäjä	74,5
India	74,0
Naribia	73,5
Tansania	73,0
Mosambik	72,5
Somalia	72,0
Uganda	71,5
Ruanda	71,0
Sierra Leone	70,5

kalaisen MIT-instituutin u-
jat siirsivät sukukalamate
hiivan Siir-grenin. Mado
väs kuolla kupuhtaneet
kahden viikon kuluttua,
kuin yleensä, vaan luikerte
vienti yhden viikon.
Tulos on yllättävä, koska
sisoluinen hiiva ja vaatii
mato ovat organismeina a-
erilaisia. Samantapaiset ge-
saattavat olla tekemisissä i-
denkin eluiden, myös il-
sen, vanhemmuksen ka-
päätelee työtä johtanut i-
nard Guarente.

Tähän asti selujoukko, j
ihminen koostuu, on pyv-
elossa aninään noin 120 v-
ta. Yläraja ei ole historian

資料 2



資料 3



The Image of the Japanese Woman in Finland

UEMURA Yukako

This essay attempts to examine the image of the geisha in Finland as a reflection of western concepts of women as an object to be possessed and controlled and the representation of foreign culture. The stereotyped image of the Japanese woman as a geisha, which was shaped after the 16th century, still exists in western world. In Finland, the word geisha is known by everyone as the name of a chocolate bar, and is used to depict the Japanese woman. The visual image of the geisha in TV commercials and a film portrays her as a mystical woman of the Far East.

(University of Helsinki)